

日本の文化と日常

動画リンク: <https://youtu.be/v8ycJW3UrYY>

■私のこと

私の名前は佐久間けんたといいます。出身は岐阜県の小さな町です。町には山が多くて、自然がたくさんあります。子どものころは川で魚をつかまえたり、雪で遊んだりしていました。

食べ物では、「飛騨牛」がとても有名です。やわらかくてあぶらの多い牛肉で、焼肉や焼き焼きにするととてもおいしいです。また、「五平もち」も人気です。ごはんをつぶして、わりばしにつけて焼き、甘じょっぱいタレをぬって食べる料理です。小さい頃、お祭りで食べるのが楽しみでした。

高校を卒業して、東京の大学に進学しました。大学ではデザインを学びました。そして、そのまま東京で就職し、今はデザインの仕事をしています。広告やホームページなどの見た目を考えるのが、私の仕事です。

働いている会社には、外国から来たスタッフもいます。日本語を一生けんめい勉強している人もいて、いっしょに仕事をしながらお互いに学び合うこともあります。

外国から来たスタッフといっしょに仕事をしている中で、日本の文化について聞かれることが多くなりました。たとえば、「なぜ日本人はすぐにあやまるの?」「電車でどうしてみんな静かにしているの?」など、私にとっては普通のことでも、外国の人には不思議に思えることがたくさんあるようです。

私はそれまで、自分の国の文化をくわしく考えたことがありませんでした。でも、人に聞かれて説明しようとすると、言葉にするのがむずかしいことに気がつきました。日本では「気持ち」や「空気」を大事にすることが多いので、言わなくても伝わると考える人もいます。けれど、それが外国の人にはとても分かりにくいようです。

その経験から、私は日本の文化をもっと深く知りたいと思うようになりました。そして、外国の人にもできるだけ分かりやすく伝えたいと考えるようになりました。この動画では、私が日々の生活の中で気づいたことや、文化について考えたことを話していきます。

■マスクを外さないのはなぜ？

ある日、会社の外国人スタッフにこんなことを聞かれました。「どうして日本では、もうマスクが必要じゃないのに、みんなしてるの？」と。たしかに、マスクの必要がなくなっただとも、日本ではマスクをしている人が多く見られます。

日本では、コロナの前からマスクを使う習慣がありました。冬には風邪やインフルエンザを防ぐため、春には花粉症対策として、マスクをつける人が多くなります。だから、マスクをつけることにあまり抵抗がありません。

でも、理由はそれだけではありません。中には「顔を見られたくないから」とか、「すっぴん（化粧していない顔）を見せたくないから」と言う人もいます。マスクをつけていると、顔をかくすことができるので、安心できるという人も多いです。マスクは、体を守るための道具だけでなく、気持ちを守る道具にもなっているのです。

コロナが流行したところから、マスクのデザインや種類がふえました。白いマスクだけでなく、黒やピンクなどのカラーがあるマスクや、息がしやすいタイプ、肌にやさしい素材を使ったマスクなど、いろいろなものが売られるようになりました。服と合わせてマスクをえらぶ人もいて、おしゃれの一部として使うこともあります。

また、「自分がうつらないため」よりも「人にうつさないため」という気持ちでマスクをする人も多くいます。これは、日本人の「まわりに迷惑をかけたくない」という気持ちが関係していると思います。

会社でも、マスクを外すタイミングは人によってちがいます。「上司が外さないから、自分も外しにくい」と言う人もいます。日本では、まわりの人と同じように行動することが安心につながることが多いです。

もちろん、最近ではマスクをしない人も増えています。とくに暑い日は、熱中症にならないようにマスクを外すことがすすめられています。でも、まわりにマスクをしている人が多いと、「自分だけ外していいのかな？」と不安になる人もいます。

見た目では分かりませんが、マスクの中には、いろいろな気持ちがつまっているのかもしれない。顔が見えなくても、その人なりの気づかいや気持ちがマスクの中にあるように感じます。

■なぜ名前ではなく「役職」で呼ぶの？

私が働いている会社には、アメリカから来たスタッフがあります。ある日、その人が「どうしてみんな名前じゃなくて『部長』とか『課長』って呼ぶの？」と聞いてきました。たしかに、日本では仕事の場で名前より役職で呼ぶことがよくあります。たとえば、「田中さん」ではなく「田中部長」と言います。これは、相手の仕事の立場を大切にしているからです。役職で呼ぶことで、「あなたをリーダーとして尊敬しています」という気持ちをあらわしています。

また、日本の会社では、たくさんの人が同じ苗字を持っていることもあります。私の会社には「佐藤さん」が三人います。そんなとき、役職で呼ぶと、どの人のことかすぐにわかります。仕事をスムーズに進めるためにも、役職を使うのは便利です。

外国の人の中には、「役職で呼ぶのは、上下関係が強すぎる」と感じる人もいます。でも、日本ではそれが「チームの中での役割」をはっきりさせるための言葉でもあります。けっして「偉い人」と「下の人」を分けるためだけではありません。

私自身も、最初は上司を名前で呼んでいました。でも、仕事の中で何度も話すうちに、役職で呼ぶことに自然と慣れていきました。そして、役職を使うことで、相手との間にほどこよい距離ができて、話しやすくなると感じました。

ただ、会社の外では名前で呼び合うこともあります。飲み会やランチのときは、「〇〇さん」と言うほうが親しみやすいからです。私は、TPO（時と場所）を考えて、使いわけています。

このように、名前と役職の使い方には、文化や人との関係が深く関わっています。私は、外国の人と話す中で、そのちがいに気づくことができました。

■自分の気持ちをはっきり言わないのはなぜ？

私の会社でいっしょに働いている外国人スタッフは、とても正直です。思ったことをすぐに口にしします。あるとき、「このやり方はよくないと思う」と、はっきり上司に伝えていました。私はそのようすを見て、少しびっくりしました。

日本では、思ったことをそのまま言わない人が多いです。「ちょっと…」「たぶん…」「それは、むずかしいかもしれませんね」など、あいまいな言い方をよく使います。私もよく使ってしまう。

なぜ、日本人ははっきり言わないのでしょうか。それは、相手の気持ちを大切にしたいからだと思います。自分の意見を強く言いすぎると、相手を不快にさせることがあります。だから、あいまいに伝えることで、やわらかく話そうとしているのです。

私が新人だったころ、ある仕事で失敗してしまいました。上司は、「これはちょっと直したほうがいいね」と言いました。私はそれを聞いて、自分がまちがっていたと気づきました。でも、上司は怒ったり、きついことは言いませんでした。その優しさが、今でも心に残っています。

しかし、あいまいな言い方には問題もあります。外国から来たスタッフにとっては、「どっちなの？OKなの？ダメなの？」と分かりにくくなることがあります。私たち日本人が思っている「気づかい」が、相手には「よく分からない言い方」に聞こえることもあるのです。

私は、外国人スタッフと仕事をする中で、少しずつ自分の言い方を見直すようになりました。優しい言い方をしながらも、大切なことはしっかり伝える。それが、相手へのほんとうの思いやりではないかと思うようになりました。

気持ちを言葉にすることは、文化によってちがいます。でも、大切なのは「相手のことを考える心」だと、私は思います。

■電車の中が静かすぎる？

とうきょう く まいにち でんしゃ の ひ わたし ゆうじん がいこくじん
東京で暮らしていると、毎日のように電車に乗ります。ある日、私の友人である外国人ス
タッフが、となりに座って「東京の電車って、なんでこんなに静かなの？」と聞いてきま
した。たしかに、日本の電車の中は、とても静かです。
しゃない ひと はな ひと
車内では、ほとんどの人がスマートフォンを見えています。話している人はあまりいません。
でんわ ひと わら こえ おお こえ き ゆうじん と
電話をしている人もいませんし、笑い声や大きな声も聞こえません。友人は、「まるで図
書館みたいだね」と言っていました。
なぜ、日本の電車はこんなに静かなのでしょうか。それは、「まわりの人に迷惑をかけな
いこと」が大切だと考えられているからです。電車は、たくさんの人が使う場所です。だ
から、自分だけが大きな声で話すと、まわりの人が困ってしまうことがあります。
また、日本では、「公共の場ではおちついて行動するべきだ」という考えが、子どものこ
ろから教えられます。学校でも、電車では静かにするように言われます。私も小学生のと
き、先生にそう教えられました。
でも、あまりにも静かすぎると、ちょっとさびしく感じることもあります。たとえば、せき
をゆずりたいとき、声をかけるのがむずかしく感じる人もいます。私も、立っているお年
寄り（おじいちゃん）に声をかけたいと思いながら、まわりを気にして何も言えなかったことがあります。
がいこく でんしゃ ともし はな し ひと どうし かいわ
外国の電車では、友だちと楽しそうに話したり、知らない人同士が会話したりすることも
あると聞きました。それも、とてもすてきなことだと思います。
いま にほん たにん じゃま だいじ きがる はな
今の日本では、「他人の邪魔をしない」ことが大事にされすぎて、気軽に話しかけられな
い空気になっているのかもしれませんが。でも、でんしゃ なか ひつよう こえ
電車の中でも、必要なときには声をかける
ことが大切です。
わたし き やさ こえ ひと おも
私はこれから、まわりに気をつかいながらも、優しく声をかけられる人になりたいと思っ
ています。

■おみやげ文化はなぜこんなに大切？

旅行に行ったあと、日本では「おみやげ」を買って会社や友人に配るのがあたりまえになっています。私も毎回、会社のスタッフのぶんを覚えて、おみやげを選びます。けれど、あるとき外国人スタッフに「なんで毎回そんなに気をつかうの？」と聞かれました。たしかに、おみやげはお金も時間もかかります。海外では「家族や親しい友人にだけ買えばいい」という考えの人が多いようです。でも、日本では、会社の人や知り合いにも買うのがふつうです。

では、なぜそこまで大切にされているのでしょうか？それは、「日頃の感謝の気持ち」や「あなたのことを思い出しました」というメッセージを伝えるためだと思います。おみやげは、ものそのものよりも、「気持ち」を伝えるための手段なのです。

昔の日本では、旅をするのはとても特別なことでした。遠くに行った人が無事に帰ってきたとき、「元気で帰ってきました」という報告として、なにかを持ち帰ることがありました。その習慣が今のおみやげ文化につながっているとも言われています。

また、おみやげには会話を生む力もあります。「これはどこで買ったの？」「旅行どうだった？」というふうな、おみやげをきっかけに会話が広がります。おみやげを渡すことで、人とのつながりを深めることができるのです。

私も社会人になってから、はじめて会社でおみやげをもらいました。そのとき、「旅行中に自分のことを思い出してくれたんだ」と思って、とてもうれしく感じました。それがきっかけで、私も旅行に行ったときは、「会社の人たちに何をあげたらよろこんでもらえるかな」と考えて、おみやげを選ぶようになりました。

もちろん、おみやげを買わなくてはいけないわけではありません。買うかどうかは自由です。でも、私は「いつもありがとう」や「ただいま」の気持ちを伝えるひとつの方法として、おみやげはすてきだと思います。

今では、おみやげを選ぶ時間もたのしみのひとつです。その場所にしかないものや、その人に合いそうなものを考えながら買うのは、小さな心のプレゼントを用意するような気持ちになります。

■なぜ感謝を伝えるのに「すみません」？

かいしゃ がいこくじん はたら いてると、にほんご のつか かた しつもん 会社で外国人スタッフと働いていると、日本語の使い方について質問されることがよくあります。ある日、スタッフの一人がこう言いました。「どうして『すみません』と『ありがとうございます』を、同じように使うの？ まちがえそうで、こわいよ」と。たしかに、にほんご では「ありがとう」と「すみません」が、ばめん によって入れかわることがあります。たとえば、ドアをおさえてもらったとき、「すみません」と言う人もいれば、「ありがとうございます」と言う人もいます。どちらも正しいですが、意味は少しちがいます。

にほん では、「すみません」はあやまるだけのことば 言葉ではありません。なにかをしてもらったときに、「手間をかけてしまって、申し訳ないです」という気持ちをこめて使うことがあります。これは、「えんりょ 遠慮」のきもち 気持ちに近いです。

いっぽうで、「ありがとうございます」は、うれしかったきもち 気持ちをストレートに伝えることば 言葉です。でも、日本人の中には、相手に気をつかわせたくないという思いから、「すみません」をえら 選ぶ人もおおい 多いです。

わたし 以前、いぜん えき し ひと みち おし 私も以前、駅で知らない人に道を教えてもらったとき、「すみません、助かりました」と言っていました。でも、そのとき本当に感じていたのは、「ありがとう」というきもち 気持ちでした。

それに気づいてから、わたし はなるべく「ありがとうございます」を使うようにしています。自分のきもち 気持ちを、まっすぐ伝えたいと思うようになったからです。

にほんご には、いろいろなきもち 気持ちを伝えることば 言葉のひょうげん 表現がたくさんあります。それはとても美しいことでもあります。が、がいこく 外国の人にとっては、意味があいまいに感じることもあります。たとえば「よろしくお願いします」や「おつかれさまです」なども、その場によって意味がちが 違います。

たいせつ なのは、ことば 言葉のえら 選び方だけでなく、そのうしろにあるきもち 気持ちをし 知ることだと思えます。相手のきもち 気持ちを考えること、それが日本語の中にある優しさの一つです。

■日本の文化は変わり続けている

私は日本で生まれ育ちましたが、ここ数年で「日本の文化は少しずつ変わってきた」と感じる事が多くなりました。とくに、外国から来た人といっしょに仕事をするようになってから、それを強く感じるようになりました。

たとえば、会社では外国人のスタッフの雇用が増えています。また、宗教や食べ物、服装についても、それぞれの考え方を大事にするようになってきました。昔は「みんな同じがいい」と言われることが多かったですが、今は「ちがっていてもいい」という考え方が広がっています。

若い人たちの中には、海外で生活をしたり、外国の人とSNSで交流したりして、世界のいろいろな文化にふれる機会が増えています。その影響で、日本の中でも「こうしなければならぬ」という考えが、少しずつやわらかくなってきているように思います。

でも、日本には今も「むずかしいマナー」や「空気を読む文化」がのこっています。だから、外国から来た人がとまどうこともあると思います。私も、言葉のちがいや考え方のちがいで、すれちがったことが何度もあります。

けれど、そんなときは、まわりの誰かが助けてくれることが多いです。困っている外国人に道を教える人、食事のルールをていねいに説明する人、日本語がうまく話せない人の気持ちに寄りそおうとする人。日本には、そういう優しさもたくさんあります。

文化は変わるものです。そして、それは悪いことではありません。新しい考え方が入ることで、もっと住みやすく、もっとわかりやすい社会になっていくと思います。

私はこれからも、日本での生活の中で気づいたことや感じたことを、自分の言葉で伝えていきたいです。そうすることで、日本の文化が少しでも優しく見えるようになればうれしいです。